

## Wordsworth の 愛

添 田 透

詩人があるものの真と善と美に触れて魂の躍動が最高潮に達した時、魂からの言葉となって流露したものが詩である。その時詩人は対象に愛を感じているともいえよう。愛は元来広いもので誰その愛とはいえぬものかも知れぬが偉大な芸術は偉大な個性を持った芸術家により創造されたものであることを考えると、Wordsworth の愛にも、彼なりの特性が見出されるのも当然である。Wordsworth は Sir George Beaumont への手紙の中で、彼の作詩生活がよってたつ thoughts, feelings, images と彼の人生とを結びつけているのは愛である旨のことを述べているが、本研究は、Wordsworth が如何なるものに、何故特にそのような愛を感じたか、又詩に現われた彼の愛の性質は如何なるものであるかを考えようとしたものである。

*The Prelude* 第2巻冒頭に

… I first began

To love the woods and fields; the passion yet

Was in its birth, sustain'd, as might befall,

By nourishment that came unsought…(*The Prelude*, II, 4)

とある。即ち物心がついてから10才ぐらい迄の自然に対して愛という感情を持ち始めた頃のことを述べているのであるが、この時代は自然に対する愛は未だ生れようとする時代でありもとより充分に意識せられたものではなかったことが考えられる。これが、やがて太陽とか月の美しさを意識するようになるのであるが、それは自然に対する自己の愛情を認識し、自然に関心を持

った結果である。唯少年の時に太陽を愛したのは歓喜の唯中に何心なく目に触れたその時々のおししさの爲に愛したのであり、成人になってから愛したのとは異質のものであったはずである。地上の命の源としての太陽を愛したのであった。少年期に於ける愛は例えば、太陽は少年 Wordsworth にとり 'glad animal movements' (*Tintern Abbey*, 74) と関係がある故に愛したのであって、自然の爲に自然を愛したというものではなかったのである。例えば次の様な詩行がある。

... I began

To love the sun, a Boy I lov'd the sun,  
Not as I since have lov'd him, as a pledge  
And surety of our earthly life, a light  
Which while we view we feel we are alive;  
But, for this cause, that I had seen him lay  
His beauty on the morning hills...(*The Prelude*, 11, 183)

この様に直接利害関係がある故に又自分を取り囲む古郷の自然の一部なるが故に彼は太陽を愛したのである。この自然に対する関心と愛が深まるにつれて、附随的偶然の美に対する愛は日を追うて寝まり、これ迄の様に介在的第二義的な自然でなく、直接自然の爲の自然を追求するようになったことが伺われる。

Those incidental charms which first attach'd  
My heart to rural objects, day by day  
Grew weaker, and I hasten on to tell  
How Nature, intervenient till this time,  
And secondary, now at length was sought  
For her own sake. (*The Prelude*, 11, 203)

そうして自然に対する愛情により、この愛の力が無ければ見過すであろう四季折々のささやかな一時的な特質について多くのものを注意する様になり、もしその愛が無ければ終に知られなかった自然と我々との関係を記録する様になり、更に自然界に満ち互る命と変化と美と孤独を心の愛によって体験することができたのである。このことは Wordsworth 自身も認めている所であるが、この辺の事情について Fenwick Note には次のように述べられている。

The moment was important in my poetical history; for I date from it my consciousness of the infinite variety of natural appearances which had been unnoticed by the poets of any age or country...<sup>1)</sup>

物心がついてから自然を如何に見、愛したかを紙面の都合上ほんの一例をあげて以上述べて来たのであるが、青年になった Wordsworth が自然に対して持ち始めた愛は少年期のものとは異り、より普遍的で、情熱的なものになっている。次行はよくそれを説明しているといえよう。

But, as a face we love is sweetest then  
When sorrow damps it, or, whatever look  
It chance to wear is sweetest if the heart  
Have fulness in itself, even so with me  
It fared that evening. (*The Prelude*, IV, 136)

これは彼が18才の夏、第2の故郷とも云うべき Hawkshead を訪れ、そこに一夏を過した時の描写であるが、自然が新しい姿で現れたこと、又この自然に対する愛も今迄とは変って新しい愛の感情であることを示している。この自然の変貌が Wordsworth の心の変化による結果であることは論をまたない。我々は今上にあげた詩行並びに彼の心の中に Venus の様に lovely に現われる image (*The Dog*, 20) 等からも理解できる様に、青年 Wordsworth が新しく実感する 自然への 愛には 無意識のうちに 人間 に対する 感情が二重写しに浮び出ていることが解るのである。この辺の事情については既に Wordsworth の研究家達が説明しているのであるが F. W. Bateson 教授は、彼の *Wordsworth: a Re-interpretation* の中で、メアリーという実在の人物と Wordsworth との恋が失敗に終り、これが彼の作品に影響を与えたといっている。兎に角少年から青年に成長した彼の自然観が新しい傾向即ち人間への愛と重なって来て、人間の感じる悦びがただ間接に自然に反射されて人間と自然との調和が見られるようになる。例えば学生の彼が或る夜、村の人々と踊りあかした時の描写 (*The Prelude*, IV) の中では自然の美しさは青年

1) Fenwick note to *An Evening Walk*

の心が青春の歓喜に燃えていることを間接に示しているだけである。人間の感じる悦びが間接に自然に反射されてこの両者の調和が見られるにすぎない。更に一步進んで *Lucy Poems* の一つである “*I travelled among unknown men...*” で始まる詩は英国に対する郷愁がうたわれているのだが、第四 stanza では

Thy mornings showed, thy nights concealed,  
The bowers where Lucy played;  
And thine too is the last green field  
That Lucy's eyes surveyed. (13)

となっており、英国の自然に対する愛には *Lucy* に対する詩人の愛が重なっている。この自然愛と人間愛との交錯した点に於ける愛が *Wordsworth* の詩精神を特色づけているといえよう。即ちこの人間に対する愛と自然愛とが二重写しになった境地に達した時はじめて *Wordsworth* は詩人としての自覚を得たというのである。

Ah! need I say, dear Friend, that to the brim  
My heart was full; I made no vows, but vows  
Were then made for me; bond unknown to me  
Was given, that I should be, else sinning greatly,  
A dedicated Spirit. On I walk'd

In blessedness, which even yet remains. (*The Prelude*, IV, 340)

さて我々は愛と結びつく彼の教育論を見ると (*The Prelude*, V) 母の愛に対する彼の態度を知ることが出来る。人は先ず母の愛を感じ取るという。

...yet doth she little more

Than move with them in tenderness and love...

(*The Prelude*, V, 250)

ここにいう *she* とは母鶏のことであるが、雛どりの中に従容自若として殆んど無干渉の態度をとっている親どりは、自然の教育法を暗示するもので、*Rousseau* 流の干渉主義に反する意味が仄めかされている。これは彼と彼の母親との関係に連がるといえよう。彼の母も又殆んど無干渉の愛を以って幼児を育てた。而もその教育法は *Wordsworth* が一生忘れることの出来ない

母性愛に由来するものである。Legouis によれば Wordsworth の母親は子供を教育する時、Rousseau の教育法に見る様な警戒心は持たなかったという。Rousseau は彼自身の体験を回想することにより、人間の本性を信頼出来なかったが為に警戒心が起きたのであるが Wordsworth の母親にはそういう体験もなく、不信の念も無かった故に、警戒心も持たなかったというのである。Wordsworth 自身も ‘the goodness of man’ に大きな信頼をおいていたことは明らかである。換言すれば人類に対する彼の信頼感は ‘terror’ がひどい時でも不動のものであった。というのは彼の人類愛は個人個人の徳性 (virtue) の認識の上にたてられたものであるからなのであるが、Duffin はこの様に人類を高く評価するという重要な意味で、彼は偉大な optimist であったといっているが、これを母の教育と無関係に考えることはできない。所で Wordsworth が母について語っているのはこと I was left alone… (*The Prelude*, II, 292) と, Early died My honour’d Mother… (*The Prelude*, V, 256)並びに *Ecclesiastical Sonnets* の Belovèd Mother! (PART 111, xxii, 9)ぐらいであり父母の死と云う重大な事件も自序伝といわれる *The Prelude* で殆んど冷たい沈黙を守っているのは彼の両親に対する愛情が強かっただけに彼の人間愛と矛盾する 何かが残る。しかし彼がこの自序伝で語ろうとする自分は極めて限られた意味での自分、即ち主観的自我であることを考えれば納得の行くことであり、一般的に母の子に対する愛は彼にとり愛の中で強烈で持続性に富んでいるものである こととは矛盾しない。 *The Forsaken Indian Woman*, *The Affliction of Margaret*, *The Idiot Boy*, ‘Her eyes are wild…’ 等母性愛は彼の極めて感動的な詩の主題である。父性愛についても同じく *Michael* に見出される様に母性愛に劣らず深い敬意を捧げている。Darbishire<sup>1)</sup> も認めている所である。

次に Wordsworth の詩中に出て来る女性で特に彼の愛情と関連性を持つ女性と云えば、Annette と Mary と Lucy と Dorothy であろう。先ず

1) H. Darbishire: *Wordsworth*, p. 27

Annette について云えば *The Prelude* (IX の 555—934, 後にこの部分だけ独立した物語詩として1820年に出版され, *The Prelude*, 1850年版では削除)に於て自己の体験としては明らかにされていないが Blois での Annette Vallon との恋愛事件と関係させて解釈されている *Vaudracour and Julia*, 又彼女との不幸なこの恋愛問題による良心の苦悩を取り扱ったものとしての *The Affliction of Margaret*, *The Thorn*, *The Mad Mother*, *Ruth* 等があるし, 彼女との間に1792年12月に生れた Anne Caroline Wordsworth について歌われた唯一の詩 “It is a beauteous evening, calm and free.” がある。確かに一般的には道徳的な聖詩人に老成していた Wordsworth ではあるが, 一方に於て自制的な意志力の強烈さに正比例して本能的欲望の熾烈さを持っていたことが考えられる。

… a Youth to whom was given

So much of earth — so much of heaven,

And such impetuous blood. (*Ruth*, 124)

という詩行があるが, これはそのような彼の性格の一面を暗示している。とはいっても彼は poem of passion は書いていない。このことについて Duffin は Harper の言を引用して次の如くいっている。

Harper says Wordsworth did not trust himself to describe the effect of the passion of love, knowing the intensity of his own nature and fearing the result of any slackening of self-control … (and it seems to me an unlikely argument)…<sup>1)</sup>

そして J. C. Smith はそのことを次のように説明している。

Wordsworth was not a love-poet in the ordinary sense. He deliberately denied himself the theme which in all ages has been the chief inspiration of lyric poetry. He once said that if he had written poems of passion, they might have been more ardent than his principles allowed; and the claim…seems less extravagant now that we know of his own passion for Annette Vallon…<sup>2)</sup>

1) H.C. Duffin: *The Way of Happiness*, p. 62

2) J.C. Smith: *A Study of Wordsworth*, p. 29

いずれにせよ自序伝といわれる *The Prelude* に自己の恋愛 (love affair) が明白な形で述べられていないのは前述した様に序曲が詩魂の形成過程を描くという思弁的意図のもとに書かれたのであり、彼の両親の死についてすら殆んど書かなかったのと同じ気持ちから、*The Prelude* がこの種の私小説的傾向になることを避けたと考えるとよいであろう。いえることは彼の詩には 'sexual love' は皆無といってよい程無く、若しあったとしても、それは非常に純化され理想化された形で展開されている。又 'love poetry' が彼の詩に欠けていることに関連しては次の様な説明もある。

The absence of love-poetry in Wordsworth's works has often been remarked upon, and indeed brought as a charge against them. He once told me that if he had avoided that form of composition, it was by no means because the theme did not interest him, but because, treated as it commonly has been, it tends rather to disturb and lower the reader's moral and imaginative being rather than to elevate it.<sup>1)</sup>

次に Mary であるが Annette と同じく確かに愛情の対象とはなったし、彼の inspiration の対象にもなったが、彼の inspiration の炎を養う為には大した役割を演じていないように思える。我々は彼の5つの *Lucy Poems* を知っている。これらは情熱的ではないが非常に深い優しい愛情 (affection) を感じさせ、愛 (love) といえる要素が含まれている。Lucy は誰れであるかについては既に研究されており多弁を要せぬが…the maid To whom were breathed my first fond vows. (*The Prelude*, XI, 261) という Mary Hutchinson への言及も含めて、異国ドイツからの母国英国への憧れから生れた理想的な女性気質が示されていると見てよからう。結局現実と作者の想像力の結合の結果生れた女性像の秀れた例といえる。ただ前述したようにこの Lucy も重要な役割を演じてはいるが彼の inspiration の炎を養う点ではそれ程の役目は果たさなかった。

彼の生涯での最も 'passionate' な 'love' は Dorothy に対する愛である

1) "Recollections of Aubrey de Vere," *Grosart*, iii, 491

う。*The Prelude* や *The Recluse* 等は、幸福や、人生に対する愛や、詩作力や思想が、a flash of light (*The Recluse*, I, 1, 92) であるかのように照らす Dorothy, その息はまさに fragrance だと形容されている Dorothy に対する愛によって如何に刺戟を受けたかを示している。後述するが、*The Prelude* の conclusion に於て彼の盲目的拡散的な愛(blind diffusive love) が imagination の助けをかりて次第に知的な (intellectual) 深さを得ることを述べる時に於てさえ、その発展を彼の生涯を通してなされた彼女の役割と結びつけて、Sister of my Soul! (*The Prelude*, XIII, 211) と呼びかけている。所で彼の愛の特質の一つは Coleridge に対するものや *Effusion on the Death of James Hogg* に見られるような友情愛と共に Dorothy をも含めての、家族愛であるということである。その家族愛は情熱的でさえあった。例えば1805年2月難船の為、船長である弟の John Wordsworth が死んだ時、Dorothy の愛情と Coleridge の友情を併せた程のものを持っていたと自らが考えていた John の死は致命的な打撃であったようである。次の詩行がそのことを明白に物語っている。

A power is gone, which nothing can restore;

A deep distress hath humanised my soul.

(“Elegiac Stanzas Suggested by a Picture of Peele Castle…”, 35)

又1812年6月には次女 Catherine が、12月には次男 Thomas が死ぬ。次男の死は Wordsworth をして「少くとも10才は老けさせた」とさえいわせている。更に、結婚することに反対する程迄に愛した、後の Mrs. Quillinan となる長女 Dora の1847年の死も Wordsworth には非常なショックであって、ついに生涯その痛手から回復することはできなかったと迄いわれている。しかしこれらの感情はめったに詩とはならなかったが、これは詩材それ自身が彼を圧倒したからであろう。しかし同時に次の様な類稀なソネットもある。

Surprised by joy——impatient as the Wind

I turned to share the transport——Oh! with whom

But Thee, deep buried in the silent tomb,



That spot which no vicissitude can find?  
 Love, faithful love, recalled thee to my mind——  
 But how could I forget thee? Through what power,  
 Even for the least division of an hour,  
 Have I been so beguiled as to be blind  
 To my most grievous loss!——That thought's return  
 Was the worst pang that sorrow ever bore,  
 Save one, one only, when I stood forlorn,  
 Knowing my heart's best treasure was no more;  
 That neither present time, nor years unborn  
 Could to my sight that heavenly face restore.

これは Catherine の死を悼んだものであるが、彼の愛が如何なるものであったかを明瞭に知ることが出来る。兄弟愛（例えば *Brothers*）、父性愛（*Michael*）、母性愛（*The Affliction of Margaret*）は彼の場合、いかにもはげしく、情熱的に述べられていることは注目に値しよう。

今一度その生涯をふりかえてみたい。自然の力を直観力の神秘的な作用で捉えた少年時代から、人間と自然との調和した瞬間を自覚する詩精神の目覚めに達した Wordsworth は、自己を強化すると同時に、その庶民性は社会の最底生活の中にも人間の権威と価値を認めていたようである。そこへフランス革命という絶好の活動舞台が提供された。そこでこの革命に突入する自分を語る段階に至った時に、彼はそれまでの自己を回想する。*The Prelude* 8 巻がそれであるが、この巻の主題を **Love of Nature Leading to Love of Mankind** として、自然の力に対する認識から進んで人間の権威に対する自覚への展開を刻明に跡づけている。フランス革命の渦中に身を投じた時、今迄彼の心の中にあった、人間性に対して抑え難い興味と愛着を持っているという事実を改めて認識したのである。H. Darbishire にいわせると、この時自然は彼の心にとり二義的なものになったという。そして我々が既に承知している如く、革命が人間に対する希望を裏切った時、彼は執拗な態度で、もっと貧しい、もっと素朴な人々、例えば浮浪人、乞食、田舎人などを

調べ、人間のうちに、特に素朴な人々の根源的な感情のうちに、美と力と神秘とを見出したのであった。換言すれば Godwin 説に従って感情を不合理なものとして退け、感情の声に耳を傾けなかったことにより失敗した Oswald のことを述べた悲劇 *The Borderers* の作者となった Wordsworth は Kant が Rousseau の *Essay on Human Inequality* から学んだものを苦い経験から学び、primal instinct や affection が

…more simple in their elements,

And speak a plainer language. (*The Excursion*, I, 346)

の状態を示す質素な人間の中に、より深い或るものを求めたのであった。この理性よりも、より深い本質的なものは、彼を高め、彼の求めていた永遠なものへ彼を近づけるもの即ち希望であり努力であり期待であり望みであり、とりわけ愛なのであった。例えば前述した様に母の子に対する愛は強烈なものであったが、彼の詩に出て来る母親達を高めているのは彼女等の永遠に続くともいえる愛の力なのである。前記した様に自然に対する愛情が人間に対する愛情と重なった時が彼が詩人として自覚した時なのであったが、人間への関心の方が自然に対するものよりも強く働いたとはいいいながらも、彼が人間のうちに見出したものは既に自然の姿と力のうちに認めたものと同じものであるはずであった。即ちこの二つの世界は元々一つのものである。両者のこの重要な相互関係は彼が自分の感覚と感情と精神とのすべてを投入することによって知ったものであるが、ここに彼の傑作の総てを支える根底が発見されるといえよう。

この人間の神秘さについて彼は

Oh! mystery of Man, from what a depth

Proceed thy honours! (*The Prelude*, XI, 329)

と述べ、更にこういった人間について次の如く云っている。

I found

Once more in Man an object of delight

Of pure imagination, and of love;

And, as the horizon of my mind enlarged,

Again I took the intellectual eye  
For my instructor...(*The Prelude*, XII, 53)

このような気持ちで見ると人間はどの様にみすばらしい姿であろうとも、その単純な静かな生活の中で人間を愛し得るものであった。上記の詩行の中で述べられた intellectual eye と云うのは non-physical eye 即ち mind であり、Godwin の analytical reason ではないのである。勿論彼にとって高度の愛は intellectual<sup>1)</sup> にならねばならぬが、あく迄も愛は愛であらねばならぬのは当然である。この人間を対象とする愛について彼は

From love, for here  
Do we begin and end, all grandeur comes,  
All truth and beauty, from pervading love,  
That gone, we are as dust. (*The Prelude*, XIII, 149)

と述べている。若し無ければ、我々は dust の如きものだとする pervading love は divine love であり、同時に彼の場合それが awe によって性格づけられているといえよう。この愛は小羊が自分の母親に感じる 'mild love' でもなければ、男性が女性に感ずる情熱的な 'human love,' 即ち明らかに一人の人間、或は小さなグループに対するものではなく、全てを含むより高度の愛である。そのことを彼は次のように歌う。

...there is higher love  
...a love that comes into the heart  
With awe and a diffusive sentiment ;  
...this proceeds  
More from the brooding Soul, and is divine. (*The Prelude*, XIII, 161)

更に

This love more intellectual cannot be  
Without Imagination, which, in truth,  
Is but another name for absolute strength  
And clearest insight, amplitude of mind,  
And reason in her most exalted mood. (*The Prelude*, XIII, 166)

1) Cf. Francis Christensen: *Intellectual Love: The Second Theme of "The Prelude"* (PMLA, Vol. LXXX, No.1)

と述べているように、我々はこの愛が黙想する魂 (brooding soul) から生れ、神聖 (divine) であることに注意せねばならない。何故ならこの愛は直覚的でなく、沈思から来たものであり、それ故 physical でないとの理由によると同じく intellectual と名づけられるからである。この intellectual で spiritual な愛は imagination より離れて存在しないことを二度に亘って我々に知らせている。その理由を彼は述べていないが多分この pervading love の対象は目には見えず又良く知られたものでない場合、それらが我々にとって生々としているのは imagination によるからであろう。我々が慣れていない事物や生活様式、我々とは共通性のない人々、及びその人々の態度や意見が常に我々のものとは異っている様な人々、そういったものを理解する様になるのは imagination を通してである。愛が imagination を活気づけ、その path から障害物を除去するのと同じ様に imagination はこのような理解を可能にする。Shelley の *A Defence of Poetry* にある様に絶対的な知的な心の力は intellectual power を呼び戻すのである。心の広さは pervading love 又は diffusive sentiment と類似関係を持っているのである。勿論 intellect とは feeling intellect と云う意味であり最も偉大な想像力に富む詩人の心といえどもやさしく、女性の softness を持ち little loves and delicate desires, Mild interests and gentlest sympathies. (*The Prelude*, XIII, 205) の持主であらねばならぬのは当然である。この辺りは彼の愛の性格の分析と云おうか所謂愛に対する彼の理論化と云えよう。若くして老成の境に到達した彼の場合、詩人としての発展は思想を併うものであることを考え併せてみると以上の段階に至るのは当然のこととは思いますが、なんとなく潑刺としたものを感じさせない。しかし何処の段階に於ても彼にとっては 'love is an unerring light' (*Ode to Duty*, 19) であったといっても過言ではあるまい。

There is a comfort in the strength of love ;

'Twill make a thing endurable, which else

Would upset the brain, or break the heart: (*Michael*, 448)

ともいっているが、総てを忍び人間の善を信じ同胞に対する同情と安寧を願

う彼の気持ちを支えている愛は Grierson のあげている St. Paul の *caritas* と云う意味の愛と同質のものであろう。<sup>1)</sup>

この愛を持っていた Wordsworth の場合彼の創作生活は幸福であったと見做すのは誤りであろうか。創作の起源は広い意味で喜びの感情にあり、この感情は広がる愛の別名でもあったのであろう。しかし同時に、一般的に言って彼の愛は規範的愛といえよう。少なくともプラトンの「饗宴」に見られるパンデモスの愛の要素は少い。（*The Prelude* は特にことわりのない場合は全て1805年版によった。）

---

1) H. J. C. Grierson: *Milton and Wordsworth*, p. 181